

低きに降るキリスト

待降節第二主日を迎えました。クランツのろうソクに2本火が灯っています。ふだんわたしたちがろうソクを使うのは停電や、災害の時くらいしかありませんが、会堂のなかに置かれたこのクランツの光は、神の創造の出来事の始まりを思い起こさせる象りであり、世の闇を照らす真の救い主の到来を待ち望む冠です。

いまわたしは「真の救い主」という表現を用いました。では真ではない救い主がいるのかというと、気休め程度とか、看板に偽りありの自称救い主は幾らでもいます。聖書の告げる福音に即して言えば、死の前に打ち砕かれるものは希望ではないのです。ペテロがこの手紙の最初のところで、手紙の受取人となったポントス・ガラテア・カパドキア・アジア・ピディニアの各地に離散した仮住まいの人びとに向かって、喜びにあふれた調子で、あなたがたには死者の中からのイエス・キリストの復活という出来事によって「生ける望み」「イキイキとした希望」が与えられていると語ったのはそのことを指しています。真の救い主とは、わたしたちの最大の敵である死に勝利した方をいう言葉なのです。キリストは死に勝利しておられる。もちろん生き物は皆死にますから、死に勝利したということの意味は死なくなる。人間が不死になるということではありません。この場合の死に勝利したというのは、死よ、お前の棘はどこにあるのか、とキリストの復活に際して語られたように、わたしたちが体験する死に至るまでのさまざまな不安や恐れ、自分が失われること、出来なかったこと、してしまったこと、わたしたちがやらしてきた様々なことへの後始末をつけずにこの世を去らねばならない、そうした一切合切のことがわたしの罪の問題としてのしかかってくる。これが刑罰として臨む死の棘です。ですから救いとは、あなたの罪は赦された。心配しなくて良い、無罪放免であるという宣言を

本当に言い渡すことのお出来になる方から聞くことです。それによって死が安らかなものになる。眠りに変えられるのです。そして、聖書は、わたしに代わってキリストが十字架で死んで下さったことにより、わたしどもの罪が十字架に釘付けにされたことを信仰によって受け止め、罪人の自分を認めて生きるように招いています。わたしたちは死に引き渡されるのではなく、キリストに引き渡される。その結果、死の棘は抜き去られ、安らかに眠りにつくことができる。さらにその出来事はこの世界で終わらない。朽ちることも萎むことも汚れることもない資産、イエス・キリストの復活という生ける希望によって、死の彼方をも望み見させる力をもつのです。このイキイキとした希望を確認するようにペテロは語りかけるのです。死者の中からの復活は現在までのところ、キリスト・イエスにおいてただ一度だけ起きた事柄です。ゆえに記念すべき出来事であり、同時に一度きりの出来事ですから繰り返しその出来事を語り伝えます。闇の力はそうしたことをなかつたことにして、変わらずに死のくびきにわたしたちを繋ぎ止め、不安や恐れによってわたしたちを操ろうとあらゆる手を使ってきますから、キリストの十字架の死と復活の出来事を教会は高らかに告げ、賛美し、神の民とされたことを共に喜ぶのです。繰り返します。イエス・キリストは死人の中からの復活の初穂とされ、死の支配は終わったのです。死なない人間はいません。しかし、それは終わりではなく、新しい命への道、門出へと変えられている。今からの後、主にあつて死ぬ人は幸いであるといわれるとおりです。天地万物を創造された神の御力がキリストを死者の中から復活させたのですから、神さまの力は生きている者だけではなく、死後の世界、陰府に置かれている者にまで及び、支配する力をお持ちなのです。キリストが陰府に捨て置かれなかつたように、キリストを信じて死んだ者たちには死は眠りに変えられている。そのことが福音なのです。そしてさらに驚くべき証言が今日の箇所で

語られています。今申し上げたことを主イエス・キリストの視点から語るならば、ご自身が陰府へと降られたことによってキリストは神に従わずに陰府へ降った「霊たちへの宣教」をもして下さったのです。これは離散した仮住まいの人びとにとって大きな慰めとなる知らせでした。この手紙が書かれた時代のことを考えますと、受取人となった人びとはイエス様の十字架から70年前後のキリスト者だったと思われます。まだ日が浅い。するとキリストの福音を受入れた人びとにとって気になったことは、自分の愛する人びと、キリストを信じずに死んだ人びとの救いはどうなるのかということだったでしょう。その意味で、今朝わたしたちが読みましたペテロの手紙のこの箇所は現代のわたしたちにも通ずる大切な問題であることがわかります。関連して少し話題を変えますが、いま半田教会は1961年に完成した北谷墓地にある信徒の墓地の改修を計画しています。その準備のなかでわたしは日本人の死生観や、墓地に関する最近の事情などにふれる機会が増えました。墓地は遺された者たちにとっては気持ちの安置場所になります。あそこに父母が眠っている。娘が眠っている。夫が、妻が眠っている。なにか節目のときにはお墓参りにゆく。そういう気持ちを置く場所ですね。最近の傾向としていまは集合墓や、散骨といった個人でお墓をもたないケースが増えてきています。個人で持っている人もお墓を継ぐ人がいないために墓じまいをするケースが多い。これは古い墓地ほど昔の檀家制度のならいで故郷にあるケースが多く、自分の現住所と遠くはなれていて利便性がない。自分自身、高齢になるともう通えなくなってくる。それで墓じまいを考えて自分の住む近くに納骨する。先日も教会関係者の墓じまいのお手伝いをしてきました。建物を建てる時の地鎮祭と似た発想で、業者の方が精抜きをしてくださいと頼まれるのだそうで、精抜きというのも山川草木すべてに霊が宿るという感覚の日本人らしいですね。こういうあたり、日本人の宗教

観は慰霊中心、崇りをおそれ、荒ぶる魂をしずめるということにあると気付かされます。その点、わたしたちキリスト者にとっての墓地というのは、キリストの復活という神の出来事によって、もはや終わりの場所ではありません。終の棲家ではなくなり、信仰をもって召されていったわたしたちの先達を思い起こし、天の御国に思いを馳せる場所です。天の門といってもよいでしょう。さてそこで手紙の内容に戻るのですが、ではキリストに結ばれることなく死んでいった者たちはどうなるのか。これは当然の心配と言ってよいものですが、ペテロがこの2通の手紙のなかで語ってゆくことは昔も今も人間にとって終わりの出来事が決して他人事ではないことをよく示しています。18節から続けて読んだ方が分かりやすいのでそこから語ります。

「キリストも、罪のためにただ一度苦しみました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しまれたのです。あなたがたを神のもとへと導くためです。キリストは肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです。そして、霊においてキリストは、捕らえられていた者たちのところへ行って宣教されました」

そうペテロは奥義を明らかにします。主イエス・キリストの御業は、わたしたちを神に導くものにとどまらず、それ以前の、ノアの時代に方舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたのに従わなかった者たちをも救うために陰府で宣教されたというのです。なぜここでノア？と思われるかもしれませんが。創世記の6章から9章までノアの洪水物語が語られます。内容を説明する必要はないと思います。よくご存知の話です。この物語は神さまが人間を創造したことを悔いられて滅ぼそうとされた。見よ、それは極めて良かったとされた被造物の世界が、人間が神のようになろうとして善悪の知識の木の実を食べた結果、神と人、人と人、人と世界の調和と一致が失われ、一人ひとりが神として振る舞う混乱した世界になっ

てしまった。神は地上をご覧になって墮落した世界をご覧になり、後悔し、創造のリセットを決意される。この時に救いの器として選ばれたのがノアだったのです。彼はなぜ選ばれたか、創世記には、その時代、ノアは神と共に歩む無垢な人であったと書かれています。これは罪がないという意味ではありません。ポイントは「神と共に歩む」人であり、神の言葉にイノセントに聴き従う人物であったということでしょう。それで晴れた日に人びとに呆れられながらもコツコツと巨大な方舟を作り続けたのです。やがて洪水が始まり、高い山のいただきまですべてが水の下となり、方舟に乗り込んだノアの家族―、ここでは8人だけが水を通して救われたと書かれています。またペテロの手紙では書かれていませんが、方舟に乗り込んだ7つがいの動物たち以外は全部人間の罪に連座して滅んだのです。この話は神話と捉えられますがその意味するところは大変重い。そして重要です。やがて水が引いて乾いた陸地が現れると、ノアは祭壇を築き、犠牲をささげて神を礼拝しました。その宥めの香りを受けて、神は残った家族を再び祝福し、世界に送り出します。またこのたびのように洪水を送って人間を打つことは二度とすまい。人間の考えることは幼いときから悪いのだ、そう仰って、雲のなかに契約の虹をおいてご自身に誓われたのです。さて創造のリセット、洪水を送ってまで清めたかった人間の背きが拭い去られたかという、その後の人間の歩みも変わらなかった。11章にはバベルの塔が記されます。そこで神は降って行って人間の言葉を乱し、全地に散らされる。この出来事は地上で最初の勇者、権力者であるニムロドによる強制労働の結果たてられたバベルの塔が神によって中止に追い込まれる。バビロン捕囚のなかで現在のかたちに整えられていった記事ということが意義深いですね。この後神はアブラハムを選び、再び人間を祝福して歩ませようと導きますが、残念ながらイスラエルも神の道から逸れ、ほしいままの歩みを続けます。

裁き、正しい道に導こうとしても繰り返し繰り返し人間の罪が現れる。主の手が短いから救えないのではない。しかも神は一度最大のカードを切っているのです。洪水による人間の罪の浄化、しかし、それはもうしないと神はご自身に誓われた。ではどうすれば神の御心に背き続ける人間を救うことが可能なのか。神はついに洪水ではなく、ご自身の独り子を世にお遣わしになり、十字架にかけることで、神の子が人間に代わってその罪を負うという仕方で人間の罪を浄化される道を選ばれたのです。地球規模の人間の罪、ノアの洪水以来れんめんと続いてきた神に背き、失われてきた人すべてをも救うご計画として、キリストが世に来られる。飼い葉桶に降られるのです。闇を照らす光として。それこそがキリストが3日間、陰府に留まれたことの意味だとペテロは取り次いだのです。神に背いた者たちのところへもキリストは降られ、宣教をなさった。だから、わたしたちはこの神の憐れみに、深いご計画に信頼してよいのではないのでしょうか。キリストを信ずることなくこの地上の生を終えた者たちにも、神の憐れみは及んでいるのです。死者の中から愛する独り子イエスを復活させられた神の御力はすべてを覆う誰一人として漏らすことはありません。キリスト・イエスはこのような執り成し手として、いま天にのぼって神の右に座して、わたしたちを見守り、導かれる方なのです。主イエス・キリストが、わたしの救い主、裁き主、贖い主であることがすべての平安の基礎であります。

お祈りをいたします。